

● 関 西

嶋 田 邦 雄

2016年の関西のコンサート会場はどこも盛況だった。オーケストラの定期演奏会や名曲コンサートだけでなく、各種のリサイタル会場も熱心なファンで賑わった。経済の落ち込みは他の地域より厳しい形で続いているのに、この熱気は何だろう。「社会の情勢が厳しい時こそ文化と民衆との真の関わりのある方が試される。やっと民衆に根差した文化が育ち始めたのではないか」とある音楽家は控えめながら、嬉しそうな表情で語った。「聞き直りかも知れないが、かなり冒険的な演目を表に出しても支持されるようになった」と喜ぶ関係者も。日本センチュリー交響楽団のファジル・サイ「交響曲第1番 “イスタンブール・シンフォニー”」(11月定期)や、ケージとサティのピアノ曲と歌曲だけで構成した演奏会(12月・奈良ゆみソプラノリサイタル)など、注目される演奏会も少なくなかった。今後、この盛況が土壌となり、さらに発展する方向に向かうのか、が問われることになるだろう。

オーケストラでは大阪フィルハーモニー交響楽団が7月の第500回定期演奏会に井上道義の指揮でルイス・バカロフ「ミサ・タンゴ」とベートーヴェン「交響曲第3番 “エロイカ”」のプログラムを演奏、“伝統と革新”を改めて問いかけた。大阪フィルには1947年から60年まで朝比奈隆を中心に125回の定期公演を積み重ねた前史があり、関西の老舗楽団として今後への一層の飛翔が注目されている。2017年には尾高忠明をミュージック・アドヴァイザーに迎え、翌18年には音楽監督に就任する。創立70周年を迎える17年から18年にかけて井上がショスタコヴィチの交響曲を4曲、尾高は17年3月に尾高尚忠「チェロ協奏曲」とR・シュトラウス「英雄の生涯」を指揮するなど多様な演目を用意している。関西フィルハーモニー管弦楽団は音楽監督のオーギュスタン・デュメイによるショスタコヴィチ「ピアノ協奏曲第2番」&「同1番」とチャイコフスキー「交響曲第2番 “小ロシア”」(9月)や桂冠名誉指揮者・飯守泰次郎のワーグナー「トリスタンとイゾルデ “第3幕”」(7月)、首席指揮者・藤岡幸夫のバルトーク「ヴァイオリン協奏曲第2番」とシベリウス「交響曲第2番」(10月)など、意欲的なプログラムで熱い拍手に包まれた。2017年も、デュメイ・飯守・藤岡トリオに客演を加えた指揮者群が伝統に根を下ろした演目やブルックナー、シベリウスのチクルス作品など多様な編成で新しい聴衆の要望にも対応する構えだ。日本センチュリー交響楽団は首席指揮者・飯森範親や首席客演指揮者アラン・プリバエフとの緊密な連携で聴衆の熱い支持を獲得。飯森によるマーラー「交響曲第9番」(4月)やプリバエフのプロコフィエフ「アレクサンドル・ネフスキー」(10月)、マックス・ボンマーによるブラームス「交響曲第2番」(9月)など客演陣による好演も注目された。飯森によるハイドンの交響曲などを中心演目とした「ハイドンマラソン」(いずみホール)もファンの根強い支持に支えられている。大阪交響楽団もミュージック・アドヴァイザーの外山雄三によるショスタコヴィチ「交響曲第5番」(10月)や常任指揮者・寺岡清高のフックス「交響曲第1番」など若々しく熱っぽい演奏が聴衆の熱い拍手を受けた。厳しい経済状況に直面しながらも定期演奏会、名曲コンサート、いずみホール定期、と数多くのコンサートで一人でも多くの聴衆を獲得しよ

うと努力し、着実にその成果を上げている。2017年も外山・寺岡ラインにオペラ演奏で緊密な関係を築くようになったダニエレ・アジマンとヴェルディ「レクイエム」(9月)を演奏する。京都市交響楽団は演奏力量の点で抜群の強さを印象付けている。定期演奏会のチケットが毎回売り切れとなる状態は相変わらず。常任首席客演指揮者・高関健によるマーラー「交響曲第6番 “悲劇的”」(3月)やメシアン「トゥランガリラ交響曲」(11月)、またサッシャ・ゲッツェル指揮のバルトーク「中国の不思議な役人」(5月)など深い感銘や反響を呼んだ演奏が多い。2017年も常任指揮者兼ミュージック・アドヴァイザーの広上淳一によるマーラー「交響曲第8番 “千人の交響曲”」(3月)やリプサイヒ指揮のルトスワフスキ「管弦楽のための協奏曲」(4月)など魅力的なプログラムがすでに話題となっている。兵庫芸術文化センター管弦楽団は2016年に楽団員の大半が入れ替わった。その直後の定期演奏会が芸術監督・佐渡裕指揮のブルックナー「交響曲第9番」(9月)。満を持して演奏に当たったのだろう。破綻のない仕上がりになっていた。それ以上に内容の濃い演奏はアレクサンドル・ヴェデルニコフ指揮のショスタコヴィチ「交響曲第10番」(10月)など。多様な客演指揮者による公演でこの楽団は目を見張るような熱演、好演を積み上げており、5年ごとの楽団員入れ替えの危機も何と乗り越える力を手にした。

オペラも実り多い年だった。びわ湖ホールはプロデューズオペラとしてワーグナー「さまよえるオランダ人」を上演(3月)。沼尻竜典の指揮。特に、M・ハンベの説得力に満ちた演出が忘れられない。“ゼンタの犠牲によるオランダ人の救済”を神がかった処理にせず、“船の沈没による二人の死”で結んだ。リアリティに満ち、緊迫した演技と歌唱を通じて、通俗的な“女性の犠牲による救済”のパターンを打ち破った。関西二期会はブッチェニの“三部作”(「外套」,「ジャンニ・スキッキ」,「修道女アンジェリカ」)を6月に、グノーの「ファウスト」を10月に上演。特に“三部作”のリアルな演出(M・リッピ)で冴えた舞台を見た。関西歌劇団が出したのはJ・シュトラウスの「こうもり」(1月)と、モーツァルト「皇帝ティートの慈悲」(11月)だが、「皇帝ティートの慈悲」は特に、注目したい上演。ステージから客席の中へと円形に突き出した舞台を作り、これを小編成のオーケストラが囲む。観客はこの演技、演奏集団を周囲から観る形。額縁舞台よりドラマの進展とより親密に向き合える。演技、歌唱陣ともレベルの高い仕上がりに。通して上演されることの稀なこの作品の、バロックから近代への過渡的な意味も示す舞台だった。兵庫県立芸術文化センターは佐渡裕プロデューズオペラでプリテンの「夏の夜の夢」。妖精を演じる日本人キャストは日本語で、人間役の英国人キャストは英語で歌うちぐはぐさが演劇的緊張を生む演出(A・マクドナルド)。プリテンの音楽も独特の面白さを生み出した。いずみホールオペラのモーツァルト「ドン・ジョヴァンニ」は中世社会に身を賭して抗うジョヴァンニを強調した演出(栗園淳)が光を放ったし、地域オペラ勢も堺シティオペラがR・シュトラウスの「ナクソス島のアリアドネ」、川西市のみつなかオペラがブッチェニ「マノン・レスコー」などで意気を示した。

室内オーケストラもユニークな活動を続けている。ピリオド楽器を駆使してバロックや古典さらには現代曲にまで挑戦し、音楽が当初持っていた革新性の再発見を目指す日本テレマン協会や、現代の合唱曲を意欲的に紹介し続ける大阪コレギウム・ムジクム。“戦争と弾圧”(10月)など、テーマに沿って貴重な作品を掘り起こし、レベルの高い演奏でファンを固めている神戸市室内合奏団、さらにユニークなシリクスフルートアンサンブルなどのグループが関西の土壌を豊かにしている。